

こども通信

暑い夏でした。いや、まだ夏は続くのですね。

長い夏。一年の半分は夏なのか。涼しくなるのは十月の途中からとか。秋が来たと思つたら、もうすぐ冬になりそう。今年の冬はどんなかな？

焦げ付くような暑さ。水不足も深刻でした。一時期は断水も覚悟しましたが、どうやら回避できそうです。

まだ暑い日が続きます。夏バテはしてないでしょうか？
少しでも早く秋が訪れることを願っています。

* *

2020年に新型コロナウイルスが始まり、人との接触を避けることや、強力な隔離などを行なったため、感染症の流行が少なくなりました。当然



患者数も少なくなり、ほぼ半減。病児保育も同じ傾向でした。そんな状態が2年ほど続きました。

その後、ノウウイルスが大流行するなど、感染症の流行パターンは大きく変化しました。流行るべき時に流行らず、流行らなくてもいい時に流行る。流行する年齢も大きく異なりました。

こんな傾向はまだ続きそうです。

加えて少子化傾向。昨年の出生数は68万人でした。当院の開業した35年前が122万人ですから、ほぼ半減です。これは小児科医療に与える影響を無視できません。

小児科が決してなくなるわけではありません。でも、その形態は変化するでしょう。さて、どんなふうになればいい

塚田こども医院

小児科・アレルギー科
漢方内科

上越市栄町 2-2-25
TEL 025-544-7777(代)
025-544-7779(保育室)
FAX 025-544-8456

ホームページ
www.kodomo-
iin.com



感染症情報

新型コロナウイルス感染症は次第に増加傾向です。新たな変異株による流行のようです。今後さらに大きな流行になる可能性がありますので、十分に注意してください。

インフルエンザはありませんでした。しかし、冬場には流行することでしょう。ワクチン接種を考慮してください。

百日咳の発生が多めです。今回の流行は全国的で、過去最大規模で起きています。終息するにはまだしばらくかかりそうです。乳児がかかると重症になるので、咳が強い子は接触させないでください。

ヘルパンギーナが多く発生していました。発熱と咽頭痛が特徴で、数日で治ります。夏かぜの一つです。

伝染性紅斑（りんご病）は少し発生です。熱もなく、発赤が出るころは伝染力がなく、そのまま登園（校）して良いです。

感染性胃腸炎の発生は少数です。

RS ウイルス感染症の発生も少しあります。

溶連菌感染症が少し発生しています。

アデノウイルス感染症も少し流行があるようです。

麻疹（はしか）の発生が全国的に問題になっています。当地では今のところ確認していません。麻疹は2回のワクチン接種でほぼ確実に予防することができる感染症です。特に1歳になったら早めに予防接種を受けてください。

のか？ 色々と考えさせられます。

* *

かは変えざるえないのなら、思い切って早めにしてしまおうと思ったわけです。

医院のカルテは、当初は紙に書いていました。それを15年ほど前に電子カルテにしました。院内にサーバーをおき、10数台ある端末を院内ランで結んでいます。現行のシステムは3代目になります。

当時は開業医レベルではまだ珍しく、医療のデジタル化の先端を行っている、という気持ちでした。いつか

これは開業医レベルではまだ珍しく、医療のデジタル化の先端を行っている、という気持ちでした。いつか

楽しみです。

この度、リモートになりました。さて、どんなふうになっているのか、

インフルエンザ予防接種

新しい点鼻ワクチン

暑い季節ではありますが、インフルエンザのことがそろそろ心配になってきました。

例年、冬場には必ず流行します。多くは1～2月の真冬ですが、早いと11月下旬に流行入りすることもあります。年内にはワクチン接種を受けて、流行に備えるようにしてください。

●インフルエンザとは

インフルエンザは突然の発熱で始まりますが、ほかの「かぜ」にくらべて、**全身症状が強い**という特徴があります。高熱、頭痛、体のだるさ、寒気、吐き気、筋肉痛などが急激に襲います。

小児では、**脳症や心筋炎などの危険な合併症**があります。高齢者は抵抗力が弱いため、肺炎などの合併症をおこしやすく、多くの方が死亡しています。

インフルエンザのタイプはたえず

変化するため、毎年必ず流行がみられますし、数年に一度は大きな流行がおきています。

2009年にはブタ由来の「新型インフルエンザ」が発生し、世界的な大流行（パンデミック）を引き起こしました（現在は季節性インフルエンザとして扱われています）。

パンデミックといえば新型コロナウイルス感染症が有名ですが、次に起きるパンデミックとしてはこの「新型インフルエンザ」も頭に入れておく必要があります。

●ワクチンのこと

インフルエンザ・ワクチンを受けることでインフルエンザにかからなくしてくれるか、かかっても軽くすませてくれるものと期待できます。

高齢の方は、重症化して肺炎を起こしたり、基礎疾患が悪化することがあります。ぜひワクチン接種を受けてください。

乳幼児は脳炎・脳症の発症を防ぐ意味合いがあります。心筋炎の合併もあります。これらを積極的に予防するのは、やはりワクチンの役割です。

す。

ワクチンの効果は約半年で切れてしまいます。ですので、毎年インフルエンザ・ワクチンを受ける必要があります。

例年10月に入るとワクチンの供給がなされるので、そこから始まり、遅くとも年内には完了するようにしています。

●新しいワクチン

従来は皮下注射による不活化ワクチンだけでした（生後6か月以降が対象）。ここに新しいワクチンが登場しました。**点鼻の生ワクチン**です（2～18歳が対象）。

両側の鼻に0.1ミリリットルずつ、合計0.2ミリリットルを噴霧します。1回の接種で終わります。

すでに痛くないワクチンとして紹介されています。注射を嫌がる小児にとっては、朗報と言えるかもしれません。

生ワクチンは、生きているワクチンウイルスを接種するので、数日以内に軽くインフルエンザにかからせることになります。この時に発熱な

どのインフルエンザ症状が出ることもあります。

免疫は鼻や喉の粘膜面にでき、ウイルスの侵入口でブロックする形になります。

両方のワクチンとも、その年の流行しそうなワクチンを数種類入れてあります。

効果は不活化ワクチンと生ワクチンは同等のようです。

●予防にはワクチン以外にも

一方でワクチンだけで完全に予防できるわけではありません。日ごろから手洗い、うがいを行い、生活リズムを整えるようにして下さい。また地域での流行が始まった時には、人混みにはでかけないようにし、もし熱などのインフルエンザらしい症状があればマスクをし、早めに受診するようにして下さい。

なお、現在のインフルエンザ・ワクチンは鶏卵を使って作られているため、鶏卵に対して強いアレルギーのある方はお申し出下さい（厳重な食事制限が必要な方以外は、通常問題はおきません）。